

パブリックスペースの類型研究

芦川 智

The morphological study about Typology of Public-space in the City

Satoru Ashikawa

The purpose of this study is the classification about public space in the city by the method of ranking from the characteristics of roads and plazas. The significant space for people among the road is plazas or squares in a city. But anyway in Japan there is not tradition about making plazas in a city. And in present day architects are making plazas or squares in the private site. The first step of this study was the ranking of public space among the private site. From this study we make the method of ranking about public space of roads and plazas in the city. This method is able to apply to both roads in the public city and public space in the private site. This method is made by two axis ; the axis of form and the axis of function. That two axis make clear the composition of public space that has complicate aspects .

はじめに

道路における人間の空間の復権が叫ばれて久しい。車社会になってから人のための空間であった道路は車に取って代わられてしまった。人のための空間を現代のパブリックスペースの中でいかに確保していくかは、都市計画の分野で重要な課題である。車と人の共存を考える立場もあるが、道路に人のための空間確保を求めるのではなく、敷地内に公共的なパブリックスペースを確保していこうとする動きは、意味があると評価されている。広場の伝統がないといわれる我が国の場合、車に占領された道路に人の空間を求めるのではなく、私有地として敷地内に広場的空間を作り上げていくことは、有効であると考えられる。

この論拠をもって、当研究の中心課題は、敷地内の道路空間や広場空間つまり、敷地内に計

画されるパブリックスペースに目を付け、その類型を捉えていくことを当面の課題としていく方向を設定したのである。

このことより、本研究の対象は都市の道路空間を中心に、道路領域に限らず都市内敷地領域にも対象を拡張して検討していくこととしている。それは、道路領域だけにとどまらず敷地内に道路領域を計画し、あるいは、広場的空間を設置する事例は多く、対象を広げていく事が、道路空間の多様性にもつながるという理由による。道路及び敷地内の公共性の高い空間をパブリックスペースとして対象化していくことが、本研究の前提となるであろう。

都市内敷地領域を対象としたとき、単独の計画主体があり、計画のコンセプトを持って設計をしている場合がほとんどであり、その意味で、計画意図を探りやすいということがいえる。こ

のように当面敷地内パブリックスペースを対象としてその空間の特性を洗い出し、レベル分けが可能か否かを判断していくことを目標としていく。

第1章 対象と研究の方法

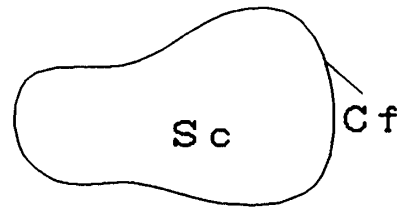
研究の対象は、敷地内の公共空間を都市のパブリックスペースとして扱っていき、その形態の類型を論じていくこととしている。ここで、パブリックとは何かを考えてみる。一般的に、パブリックという概念は、プライベートという概念と2対で考えられる。ヘルツバウアーはパブリックという概念について以下の様に記述している。つまり、『パブリックとプライベートという概念を空間の言葉にすれば、「集団的(COLLECTIVE)」と「個人的な(INDIVIDUAL)」と言い換えられる。より厳密には、パブリックとは集団的に維持管理され誰でもがいつでも立ち入れる領域であり、プライベートとはその維持管理に責任ある人や小さなグループによって立ち入りの可否が決められる領域であるといえる。』（「都市と建築のパブリックスペース(ヘルツバウアーの建築講義録)」より）としている。ここで、集団性と個別性という概念が用いられているが、この概念は、二者択一概念ではなく、段階を伴った尺度化の可能な概念ではないかとの解釈をし、パブリックとプライベートについても同じように段階設定の可能な尺度化出来る概念として捉えていこうと考えている。

つまり、都市のパブリックスペースに対して、何らかのランキングの出来る手法を導入することによって、パブリックとプライベートの間をレベルに分け、そのレベルの性質を位置づけていくことによって、そのパブリックスペースとしての性格を規定し、類型を導き出していくことを最終的目標と考えている。

第2章 敷地内道路空間と道路空間の規定と公共性のレベル区分

2-1 基礎的概念の規定

都市の領域に境界があるか否かについては、検討の余地があるが、ここではその論議は割愛し、とりあえず特定の都市が名称づけられることによってある限定される連続した領域を設定できるという前提をとることとする。それを点集合として捉え、 S_c とする。その境界を C_f とする。



次に、一般的な道路領域を考えると、地上の2次元平面上で、連続した領域と考えられる。これも点集合として捉え、 S_r とする。一般的な道路領域としたのは、当研究の対象とする敷地内パブリックスペースを PUS として特別に規定できるようにするためである。

第1に地上の領域から、ある限定された都市領域 S_c と、道路の領域 S_r を規定すると以下の式で都市内道路領域 S_r^* を規定できる。

$$S_r^* = S_r \cap S_c$$

S_r^* : 都市内道路領域

$$S_r^* = \{P \mid p \in R^2, (P \in S_c \wedge P \in S_r)\}$$

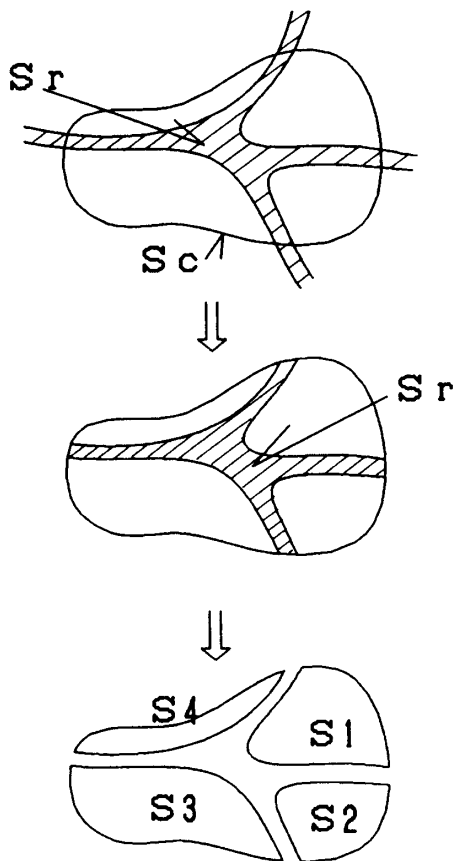
つまり、都市内道路領域を閉じた領域として規定できる。そして都市領域から S_r^* を除外した領域は、有限個の閉じた領域すなわち、敷地領域(私有地領域)として抽出することが出来る。

$$S_i = C(S_r^*) \cap S_c$$

S_i : 敷地領域 $i = 1, n$

$C(S_r^*)$: S_r^* の補集合

$$S_i = \{P \mid p \in R^2, (p \in C(S_r^*) \wedge p \in S_c)\}$$

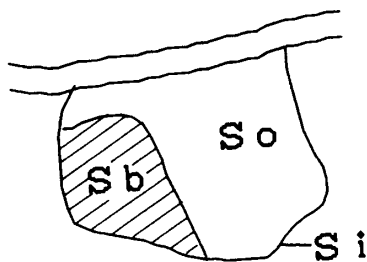


次に、敷地空間から、構築物領域を除外した領域を敷地内のオープンスペースと一般に呼ばれる。以上の関係を示すと以下のようになる。

$$S_i = S_o \cup S_b$$

S_i ：敷地領域 S_o ：敷地内オープンスペース

S_b ：構築物領域等



この拡張された敷地内オープンスペース領域はその敷地における計画によっては、不特定の人々に開放されたパブリックスペースを構成している場合がある。そのパブリックスペースは、上記の都市内道路領域から連続した空間として

構成されている事が前提となっている。このような空間を当研究の対象領域として考えていこうとしているが、ここで、構築物領域について概念を広げた考え方を導入する。つまり、人が自由通行できる領域と自由通行できない領域とに区分していく考え方であり、自由通行できないという意味では、密植された森林・林も構築物領域と考えられるし、建物内部でも自由通行できる空間として考えられている場合は、拡張してオープンスペースとして対象化していくことである。つまり、ロビー空間でアトリウム的に作られ、不特定の人々の進入を許す場合は、対象と考えていく事としていきたい。その意味では、敷地内オープンスペースと構築物領域とに分けるというよりも、敷地内の道路の延長領域として規定していった方が認識しやすいかもしれない。

そこで、この拡張された意味での敷地内オープンスペースを考えたとき、二つの領域に区分されると考えられる。つまり、不特定多数の人々に開放されるパブリックスペースと、特定の人々の共有領域すなわちプライベート領域である。一般的には、特定の人たちの共有管理を行っている場合と、個人の管理の住居の個別庭のような場合とがある。これを表現すると

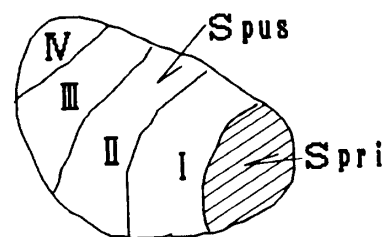
$$S_o = S_{pus} \cup S_{pri}$$

となる。ただし S_{pus} ：敷地内パブリック領域

S_{pri} ：プライベート領域

である。

$$S_{pus} = \{P \mid p \in R^2, p \in S_i, (p \in C(S_{pri}) \wedge p \in S_o)\}$$



ここで、Spusを本研究のテーマであるPUS（パブリックスペース）と定義する。Spusは、当面敷地内のパブリックスペースとして検討していくが、Sr*（都市内道路領域）についても同等な空間として、段階的考え方を適用できるパブリックスペースとして特に広場領域のような空間については、PUSの拡張空間としてSpusに組み込んだ検討をしていくことを次の段階の課題とする。

2-2 敷地内パブリックスペース（PUS）の段階的認識

さて、敷地内に公共的空間を計画する場合、その性格は、同等ではなくいくつかの段階分けがなされる事が通例である。そのパブリック性の度合いの状況を捉えていき、いわゆる広場的空間の特性へとつなげていくことが本研究の目的である。

パブリック性の度合いについての尺度として、人間の行動範囲の自由性に着目して考えると、一つの例として以下の4つの段階を設定する事が出来る。これをパブリック性の度合いをはかる一つの指標とする事もできる。このレベル分けについては、平成7年度の日本建築学会大会論文として提出したものであるが、レベル設定については、若干不明解な部分を有しており、これを基礎として次の段階へ展開をはかる必要性があった。

以下の4レベル設定による段階は、人の通行・滞留の状況により設定されたものである。

レベル1：不特定多数のヒトが自由に行き交うことができる。

レベル2：他レベルの空間と領域として区別されているが、自由に入ることができる。多数のヒトは移動する。

レベル3：自由に入れるが、領域が閉鎖形に規定されており、多数のヒトが停滞する。

レベル4：条件を満たすヒトしか入ることができない。

「レベル1～3」はSpusすなわち敷地内のパブリック領域の区分であり、「レベル4」はSpriすなわちプライベート領域に最も近いといえる。また「レベル2～4」はその敷地内に入ることを目的として訪れたヒトが入ることのできる領域である。

「レベル1」はその敷地や敷地内の施設に来る目的でなくても足を踏み入れることのできる空間である。例として、道路の延長としての敷地の導入部分として位置づけられるものであろう。

「レベル2」は移動のための経過空間であり、複数の異なる用途（条件）をつなぐ空間でもある。敷地の中で回廊やテラス、通路として計画されたものが考えられる対象空間である。

「レベル3」はいわゆる広場的空間であり、構築物による囲われ度が高い場合が多い。

「レベル4」は特定のヒトたちの共用空間であり、侵入に際して何らかのチェックが行われる場合が多い。例えば集合住宅の共用庭がある。パブリック空間としては最もプライベート領域に近い段階であるが、おそらく管理システムなどによって規定されている場合が多いと思われる。

以上のレベル設定を、実際の10事例に則して、適用し、その状況を示していったものが、図2-5として示してある。

第3章 パブリックスペースのランキング手法

敷地内パブリックスペースすなわちPUSの考え方、構成の仕方などが示されたわけであるが、一般の道路空間よりはるかに多様な空間の構成

図2-5 PUSレベル分け事例リスト (第1段階の分析結果)

No.	名称・建設年・所在地	配置図	公共度	敷地面積	施設機能	備考
1	恵比寿ガーデンプレイス 1994年 東京都渋谷区			82365㎡	百貨店 博物館 集合住宅 店舗 ホテル レストラン チャリティビル	サッポロビール恵比寿工場の跡地を利用した複合都市である。JR恵比寿駅からは「動く通路」で敷地のセンター広場へと導入される。広場は商業施設に囲まれ、人々で賑わっている。
2	西戸山タワーガーデン 東京グローブ座+プラザ 1988年 東京都新宿区			18435㎡	集合住宅 劇場	25階建ての高層マンション3棟と文化施設が計画されている。高層棟の間には低層の住宅付店舗が配置されその全面に開鎖的な広場とさらに円形劇場が設けられている。
3	緑園都市 コタ・コート・アム・イン・プラザ 1993年 神奈川県横浜市中区			2522㎡	集合住宅 店舗 事務所	「緑園都市」は相模鉄道の駅の名前である。計画全体では建主・用途の異なる8棟の建物から成るが、それぞれの建物に共通して「通り抜けの道」が導入されている。
4	横浜市民文化センター 1990年 神奈川県横浜市中区			7970㎡	市民センター 公民館 事務室 ギャラリー ワークショップ 展示ホール 宇宙劇場 体育施設	施設は「こども館」「市民センター・公民館」「市民ホール」の3ブロックから成る。全体は「第二の自然」としての建築」というコンセプトで設計された。
5	ヒルサイドテラス 1967~92年 東京都渋谷区			17943㎡ (1~3.5.6期)	住宅 店舗 チャリティー	第1期から6期まで25年をかけて計画された低層集合住宅群で、その1階は店舗と小広場・道で構成されている。敷地内に植栽始まったが、背後の旧朝倉邸庭園が緑を提供している。
6	東京都庁新庁舎 1990年 東京都新宿区			14350㎡	都庁 事務室 会議施設 ギャラリー 展示室 飲食施設	敷地は以前の淀橋浄水場跡地の新宿新都心地区の3つの敷地から成る。半円形の議会議事室に囲まれた都民広場は様々な催し物が開催される。
7	アクティシティ浜松 1994年 静岡県浜松市中区			43305㎡	多目的ホール コナートホール コナートセンター 店舗 賃貸事務所 ホテル 展示・イベントホール 楽器博物館 研修交流センター	公共建築と民間施設が同一の敷地内に存在する官民一体の総合的開発である。低層部分の屋上は「ショパンの丘」「音楽広場」「いこいの広場」といった屋上庭園が設けられている。
8	世田谷ビジネススクエア 1993年 東京都世田谷区			21318㎡	事務所 レストラン 店舗 (地下鉄駅)	地下鉄駅直結のオフィス空間は高層棟に容積を集中させることにより、その足下の空間を周辺施設へのアプローチ空間としてまた近隣の子どもたちの遊び場として提供している。
9	横浜ビジネスパーク(YBP) 横浜ガレリア 1990年 神奈川県横浜市中区			54099㎡	レストラン 事務所 展示施設 (ガレリア) コンピュータビル	横浜駅に近接し、みなとみらい21地区と共に業務核都市横浜の一端を担う。横浜ガレリアはYBPの中心に位置し、基本コンセプトをユーモアとする展示ホール・プラザから構成される。
10	水戸芸術館 1990年 茨城県水戸市			13941㎡	コンサートホール 劇場 美術展示室 会議場 シンボルタワー	地方都市の中心地に計画された文化複合施設である。各施設は独立した活動を行いつつも、共通のスペースでつながる構成である。広場でも各種イベントが開催される。
凡例	Lpus = 1 : Lpus = 2 : Lpus = 3 : Lpus = 4 :					

法を導入していることが判明したし、その構成法に対応するランキングはおそらく設計者の緻密な観念の下に構成されなければならない。その意味で、2章に示した4段階のレベル分けでは、対応できないであろうとの判断の下に、次のステップへと進む。

3-1 パブリック空間の諸相

都市のパブリック空間とは誰もが進入でき、誰もが利用でき、誰もがその空間の性能について云々出来る対象である事である。パブリック空間に対峙する空間は、プライベート空間である。一般には個別の建物等で占められる敷地空間がこれにあたるであろう。ただし、敷地内空間にもパブリック空間は存在し、現在の都市空間の中で、有効な空間として存在していることは確かである。今回はとりあえず道路・広場の公共空間をパブリック空間として、その多様な姿を整理する方法を提案することとする。

パブリック空間の多様性を整理する軸として、A空間の軸と、B機能の軸を取り上げる。空間の軸とは、一つのまとまった空間としてみたときにそれが、開かれた空間か、閉じられた空間かを判断する軸である。これは空間の特質を判断する一つの尺度であり、パブリック空間としての広場の形態を論ずる場合の重要な尺度と判断するからである。もう一つの軸としての機能の軸は、空間の使われ方であり、空間を判断するときに機能と形態が重要な要素となることからきている。機能性についても同じように尺度化としては、開かれた機能と閉じられた機能を尺度としている。開かれた機能とは、多機能に対応する事、他の機能への連携を可能とする機能である事、あるいは、多目的な機能等を意味する。この二つの軸を使ってパブリック空間の諸相を論ずるとすると、パブリック性の度合いによっていくつかのレベルに分けることが出来

る。

それが図3-1に示された段階区分の図式となる。

人々が、パブリック空間の中で通行していくか、滞留しているかは、一つの現象であり、その現象を誘発する条件として、空間とそこに内在する機能がそれを果たしていると考ええる。空間の要素とは、建築的なあるいは環境的な要素でいかに形態的な境界条件を設定しているかにかかわるものであり、機能的な条件は、その空間が指向するもの、そこで人々は何をするか、何を目的にその空間に進入するのか等によって判断される条件である。

3-2 空間と機能の軸によるランキング

空間と機能の二つの軸によってランキングを考えると、そのそれぞれについての条件を設定することによって、3章で行った4段階のレベル設定での問題点を解消することが出来るであろう。以下にその条件を示す。

A。[空間軸]：空間が閉じているか、開いているかの判断

A-1空間の物的な仕切の要素が開放的か閉鎖的か

A-2視線がその空間内で閉じているか他の空間へのびているか

A-3別の空間とつながりがあるか独立した空間か

B。[機能軸]：機能が開いているか閉じているかの判断

B-1その空間での人間流動が通過的であるか滞留的であるか

B-2他の空間の機能と連携的機能しているかその空間で機能が独立できる様相を有しているか

B-3複合的機能（多目的か）か単一的機能（単一目的か）か

以上2軸6項目の判断を以下の各事例にそって説明し、その考え方を明確にしていく。2軸6項目の要素で判断することが妥当であることを示すことは現在の段階では出来ないが、それぞれの項目をまず明快に示していくことが必要である。示すための事例は、日本の敷地内計画事例と海外の都市広場事例両者に及ぶ。いわゆる都市パブリック空間の事例にそってその特性を示し、概念を明確に示すことが第一に必要であると判断している。

2軸6項目を基礎とするランキング手法の妥当性は、むしろ各事例を説明する基盤としての表現能力と記述性能によって逆に診断していくこととなると考える。つまり、このランキング手法が、敷地内計画事例と都市広場事例を記述していったときに求められる類型を導入するのに有効か否かを判断していくこととする方針である。

3-3 パブリック空間のランキング手法

以上の2軸6項目の要素によってパブリック性（公共性の度合い）をランキングすると図3-1に示されるような構成を作ることが出来る。そして、ランキングは、5段階となる。レベル1は、最もパブリック性の高いつまり、開放的な空間を有し、開かれた機能を有する対象である。レベル5は、最もプライベート空間に近いパブリックスペースであり、閉鎖的な空間形態をなし、閉じられた機能つまり、個別的単一的機能に対応する機能空間である。機能性と空間性のそれぞれを3段階で区分し、その複合として9つのタイプを導入している。9つのタイプを整理して5つのレベル化を行っているものである。

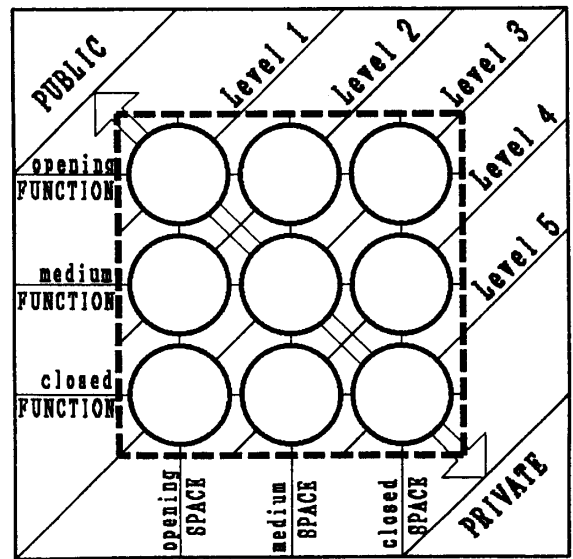


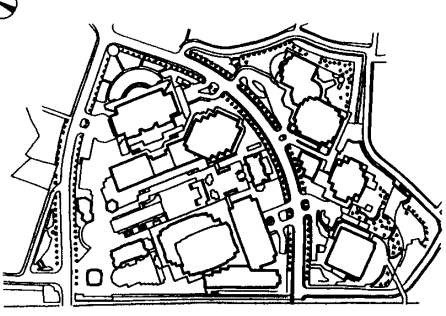
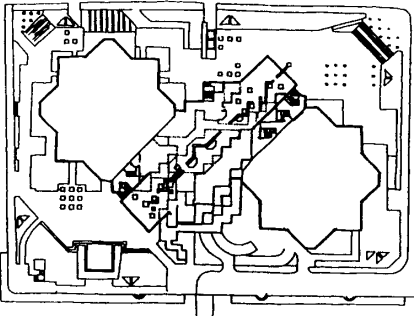
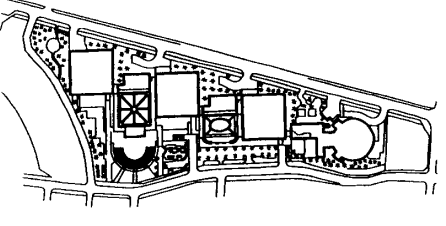
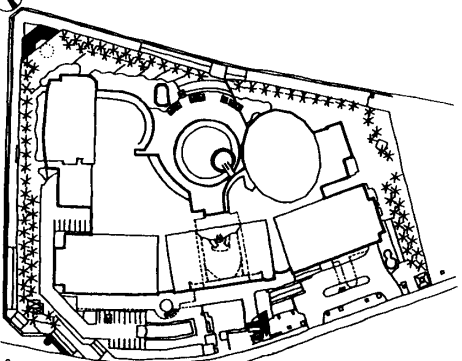
図3-1 パブリック空間のランキング図

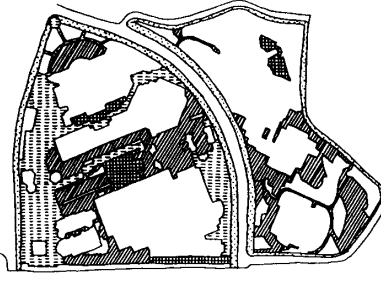
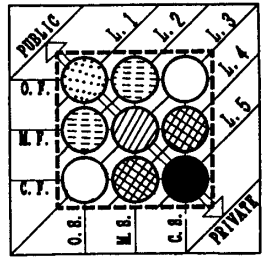
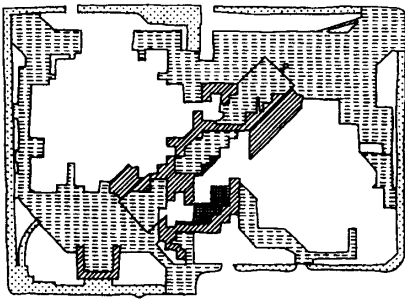
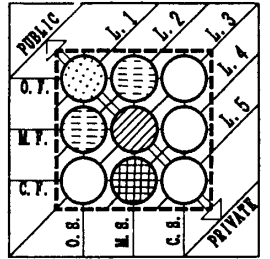
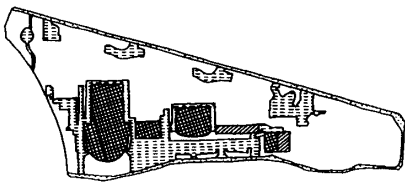
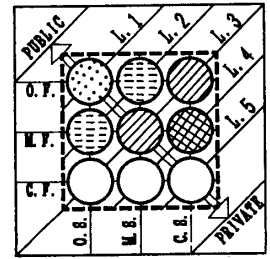
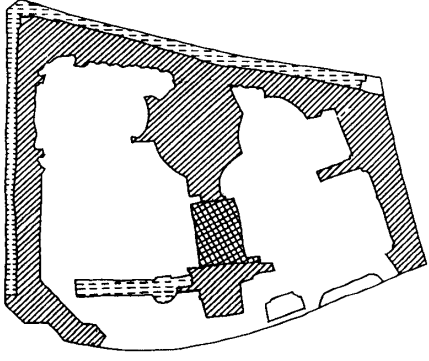
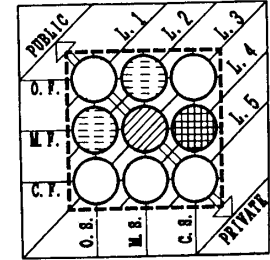
第4章 パブリックスペースの類型：事例分析

本章では、前章で設定されたパブリック空間のランキング手法の表現性や記述性能について確認をしていくために、それぞれの事例に適用して、その分析状況を把握していく段階である。適用をはかる対象として、日本の現代の敷地計画事例20例を取り上げる。いずれも、現地調査を行い、対象の観察と諸データを聴取・把握してきたものを使っている。

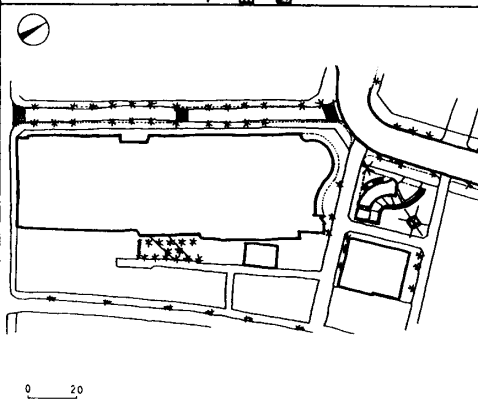
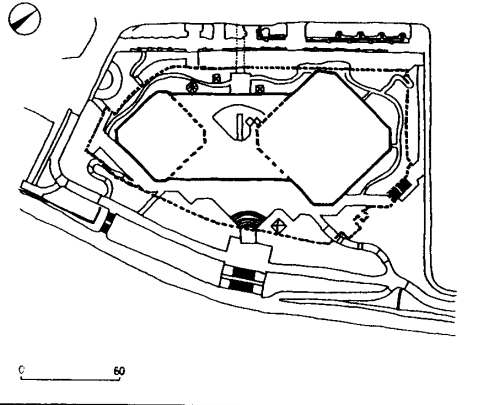
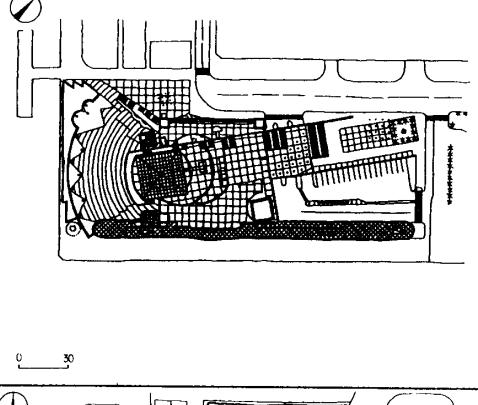
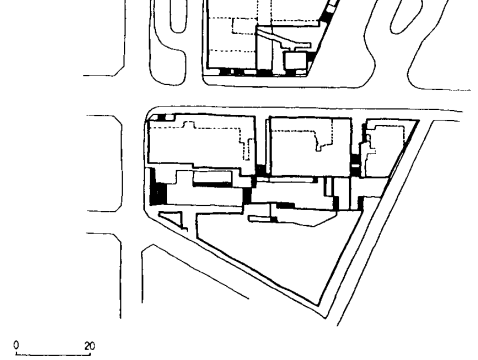
いずれの事例についても調査者群の複数の判断によってそのパブリックスペースの構造を判断し、性格付けを行っているものである。その判断にあたっては、3章3-2に示した空間軸と機能軸それぞれ3項目による判断尺度を基盤に行ったものである。判断自体の客観性については、明確に示すことは出来ないが、調査担当者の合議によって規定していく点が若干でも意味を持っているものと判断している。この章での目的は、事例自体の判断の妥当性というよりも、むしろパブリック空間のランキング手法として提案されたものの妥当性を問うものであると認識している。

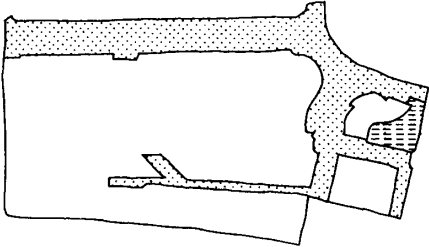
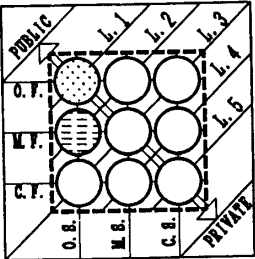
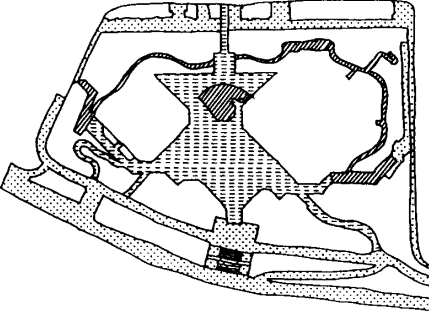
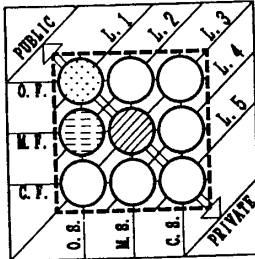
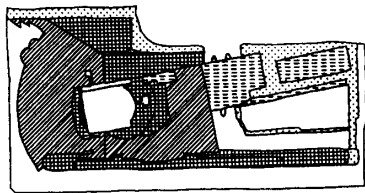
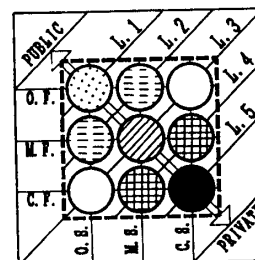
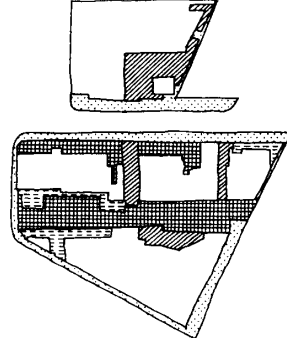
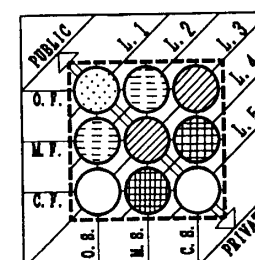
PUS 類型研究事例リスト

CODE	施設名称	施設データ	平面図
PUS-01	恵比寿ガーデンプレイス	<p>所在地：東京都渋谷区恵比寿4-20 東京都目黒区三田1-4、13</p> <p>用途：事務所、店舗、共同住宅、ホテル 劇場、美術館、スポーツ施設 映画館、博物館、派出所</p> <p>竣工年：1994年8月</p> <p>敷地面積：82,965.31㎡</p> <p>建築面積：31,681.73㎡</p> <p>建蔽率：38.37%（許容 38.76%）</p> <p>設計：久米設計 ハンセツリン&アソシエイツ</p> <p>施工：大成・東急・青木・五洋・飛鳥</p>	 <p>0 100</p>
PUS-02	シーパンス	<p>所在地：東京都港区芝浦1-2-1-3</p> <p>用途：事務所、店舗、駐車場</p> <p>竣工年：1991年1月</p> <p>敷地面積：26,468.49㎡</p> <p>建築面積：10,649.78㎡</p> <p>建蔽率：40.3%</p> <p>設計：清水建設、NTT都市開発</p> <p>施工：清水建設、共立建設</p>	 <p>0 40</p>
PUS-03	西戸山タワーガーデン 東京グローブ座+プラザ	<p>所在地：東京都新宿区百人町3-420-50</p> <p>用途：劇場、集合住宅、広場、駐車場</p> <p>竣工年：1988年3月</p> <p>敷地面積：18,435.46㎡</p> <p>建築面積：1,154.24㎡</p> <p>建蔽率：</p> <p>設計：磯崎新アソシ、設計監理共同体</p> <p>施工：共同企業体</p>	 <p>0 100</p>
PUS-04	シーフォートスクエア 天王洲アイランド	<p>所在地：東京都品川区東品川2-3</p> <p>用途：店舗、ホテル、住宅、劇場、事務所</p> <p>竣工年：1992年5月</p> <p>敷地面積：22,129.00㎡</p> <p>建築面積：12,937.00㎡</p> <p>建蔽率：58%</p> <p>設計：アール・アイ・エー</p> <p>施工：鹿島</p>	 <p>0 50</p>

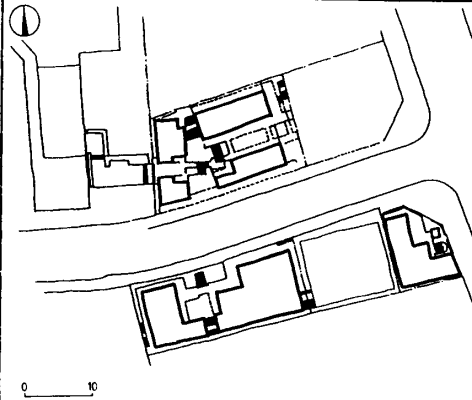
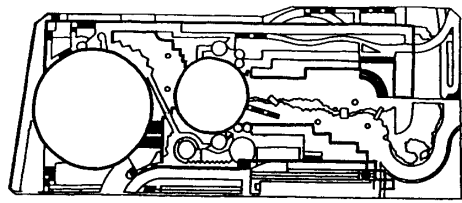
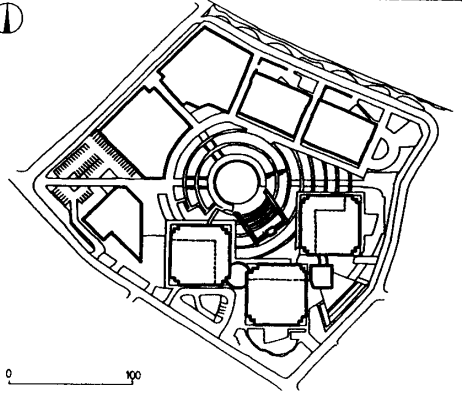
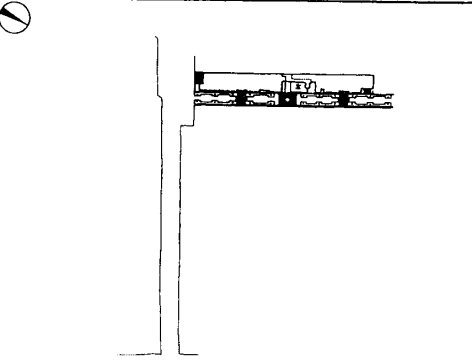
PUS 図	PUSランキング図	備 考
		<p>このプロジェクトは山の手線内では最後の大規模開発といわれる。高層ワズ、集合住宅、ビバケーション、クラブハウス本社である。これらの建物は一見したところに独立して存在するように見えるが、実は地下で全てが一体につながっている。恵比寿ガーデンプレイスという名前が示すように、敷地内の縁をできるだけ残した。また雨の日でも快適に過ごせるような空間を単なる通路として扱うのではなく有機的に機能する施設として考えた。センター広場は、大きなガラス屋根が架けられ、ビル風を防ぐとともに雨の日にも屋外に出られる自由を与えている。</p> <p>担当者：夏允淑・三島理香</p>
		<p>東京・芝浦のウォーターフロント再開発地域であり、縦横に流れる運河、眼前に広がる東京湾、浜離宮・東芝ビルから続く街区としての面的な広がり、都心には得がたい大きな空が景観の特質を成している。ツインタワーのオフィス棟は、周辺環境への影響を配慮して、街路に対して45度振られて配置された。その中央には長さ100mの、大アトリウムが位置する。配置計画は中央の区道の機能を、車については付替道路側に、歩行者については中央に配置されたアトリウムを経由する動線と、運河沿いの提供緑地を回遊する動線に明快に分離、周辺環境および敷地内の公開空地はこの主旨に沿って整備された。</p> <p>担当者：夏允淑・山本明美</p>
		<p>この建物は25階建ての高層マンションが3本と文化施設がある。雁行して配置される3本の高層棟に挟まれて、二つの3階建ての住宅付層がある。その前面に防犯上ある程度閉鎖的な印象を与える広場がほしいということで、二つの広場は同じ要素を持ちながら、異なった印象を持つ。ひとつは、ルネッサンスの格式とプロポーションを持った広場に、もうひとつはバロック形式にした。そして、円形劇場はギリシャの劇場を元につくられた。文化施設は、シェークスピア時代の様子を形として設計された。</p> <p>担当者：夏允淑・三島理香</p>
		<p>敷地内には、オフィス、コンドミニアム、ホテル、店舗、ホール、敷地内を通過しているモノレール羽田線の新駅を建物内に取り込んだ設計になっている。建物の配置は、オフィスタワーの群による壁を敷地の両側に置いている。海側には、店舗、レストラン、ホテル、ホールなど街の賑わいを呼ぶ施設と、広場、公園などヒューマンスケールな歩行者のための空間とし、一方道路側の高速道路、モノレールといった都市的スケールの空間を分けながら壁による東西での空間構成の分離、展開の意外性を強調することによって、海側の歩行者のための空間を大きくきわだたせることを意図して設計された。</p> <p>担当者：夏允淑・山本明美</p>

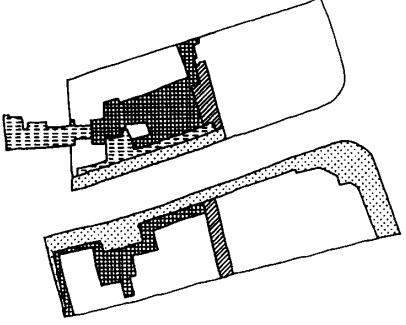
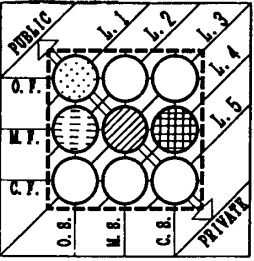
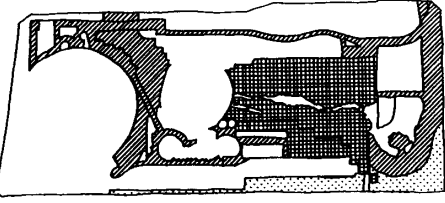
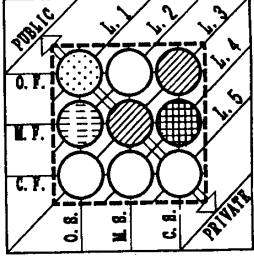
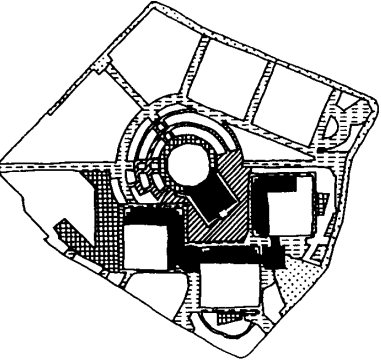
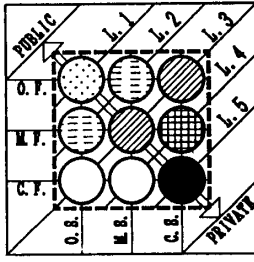
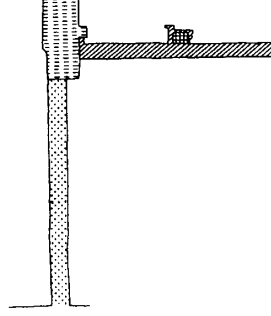
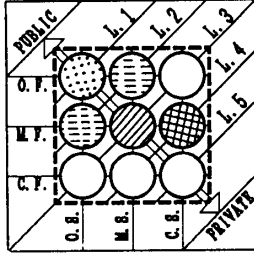
PUS 類型研究事例リスト

CODE	施設名称	施設データ	平面図
PUS-05	日比谷モール	<p>所在地：東京都千代田区有楽町1</p> <p>用途：事務所、店舗、映画館、スタジオ</p> <p>竣工年：1987年9月</p> <p>敷地面積：5,522.95㎡</p> <p>建築面積：4,057.14㎡</p> <p>建蔽率：77.09%（許容100%）</p> <p>設計：アキソ計画研究所</p> <p>施工：竹中工務店</p>	 <p>0 20</p>
PUS-06	聖路加ガーデン	<p>所在地：東京都中央区明石町8-1</p> <p>用途：事務所、共同住宅、ホテル</p> <p>竣工年：1994年5月</p> <p>敷地面積：13,033.00㎡</p> <p>建築面積：9,298.00</p> <p>建蔽率：71.28%（許容100%）</p> <p>設計：日建設計、東急設計コンサルタ</p> <p>施工：鹿島建設、大成建設、大林組、清水建設、前田建設工業</p>	 <p>0 50</p>
PUS-07	晴海客船ターミナル	<p>所在地：東京都中央区晴海5-7-1</p> <p>用途：客船ターミナル</p> <p>竣工年：1991年3月</p> <p>敷地面積：25,723.35㎡</p> <p>建築面積：8,469.52㎡</p> <p>建蔽率：32.92%（許容100%）</p> <p>設計：竹山実建築総合研究所</p> <p>施工：清水建設他3社JV</p>	 <p>0 30</p>
PUS-08	緑園都市 アース・プラザ・アムス・コート・G.F	<p>所在地：神奈川県横浜市泉区緑園</p> <p>用途：店舗、事務所、住宅、駐車場、スカッシュコート、浴場</p> <p>竣工年：1992年10月～1994年9月</p> <p>敷地面積：4,642.90㎡</p> <p>建築面積：3,210.12㎡</p> <p>建蔽率：69.0%</p> <p>設計：山本理顕設計工場</p> <p>施工：相鉄建設、西松建設</p>	 <p>0 20</p>

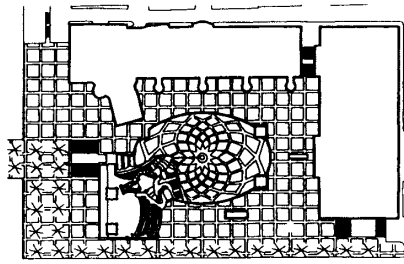
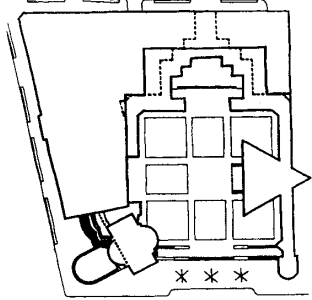
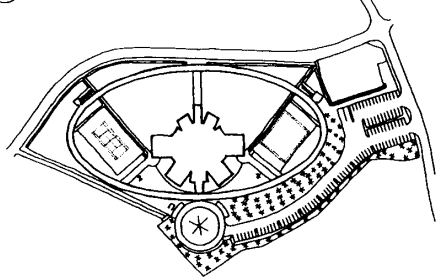
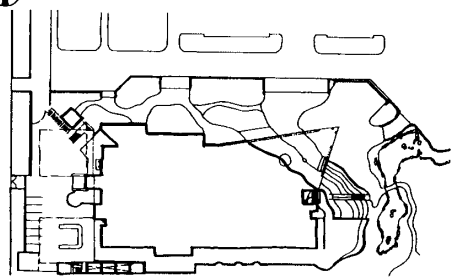
PUS 図	PUSランキング図	備 考
		<p>このプロジェクトは1970年から東宝を核に日比谷商店街とこの地区の将来を論じ合い、幾多の提案を行ってきたものである。そして1982年東宝の大規模映画館2館の有楽町マリオンへの移転決定を契機に具体化へ動き出した。動線計画上の工夫として、地下2階への店舗客動線があげられる。</p> <p>担当者：夏允淑・山本明美</p>
		<p>聖路加国際病院に引き続いて再開発の第2フェーズとして、聖路加ガーデンが出来た。二つのタワーは、共に隣切りとセットバックによって陰影のある表情をもたせ、類似性のある外観をつくっている。足元のアトリウム（大屋根広場）と高層のブリッジで二つを接続し、相互に関連性を持った超高層ツインタワーとしての特徴あるシルエットをつくっている。建物の2階レベルは人工地盤とし、大屋根広場から外の広場、親水公園、そして水辺のテラスへとレベルを下げて、周辺環境と連続した空間を作り出している。</p> <p>担当者：夏允淑・山本明美</p>
		<p>東京湾で唯一の外航船埠頭である晴海客船埠頭にできた客船ターミナルである。客船利用者のためのターミナル機能の拡充を図るとともに、東京湾のシンボルとして一般の人が楽しむことができる。税関、検査室などの入国管理施設、船客の乗降施設、待合室、送迎ロビーなどの基本的な施設のほかに、ホール、ギャラリー、展望台、レストランなどの施設が付け加えられた。外からの風景通り（夜景）に重きが置かれている。周辺の広場、プラザ、デッキ、テラス等の変化に富んだランドスケープ、光との関係、いろいろな場所からの風景として、きめ細かくデザインされている。</p> <p>担当者：夏允淑・山本明美</p>
		<p>アムニス、ブラード、GFは、一階部分は、通り抜けの道を介して同じデザインガラスの底がかかったアーケードが通りにそって用意されており、1つの建物の中を歩いていくような印象を受ける。コートコートは、スカッシュコートがある建家でまわりの建家に囲まれた広場がある。おのおのの建家がその敷地内で、完結するのでは無く、その敷地境界を単なる隙間から通り抜けの道というかたちに変えておくことによって、隣合う建物同士が、手を結び、個の建築から都市という環境に拡張されていく。いわゆる、インターアクションシティ計画である。</p> <p>担当者：山本明美</p>

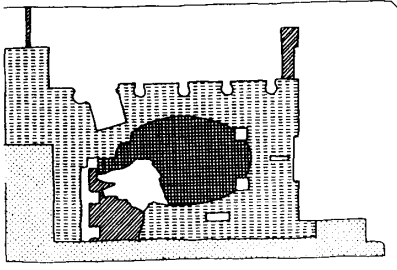
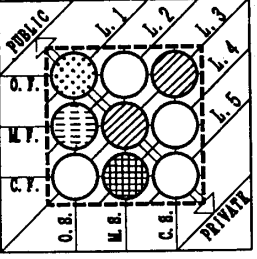
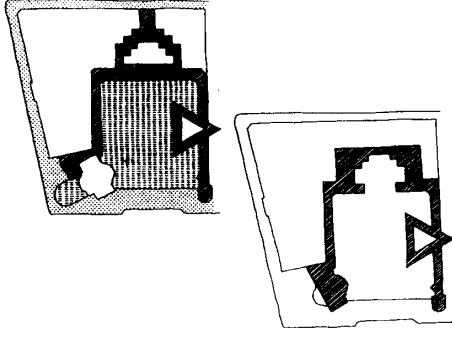
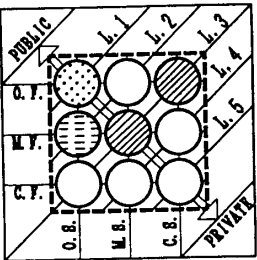
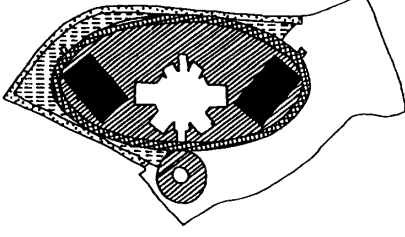
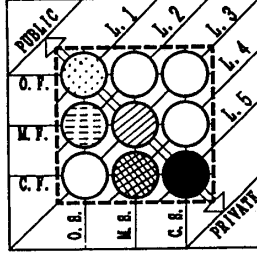
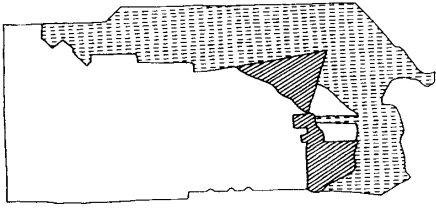
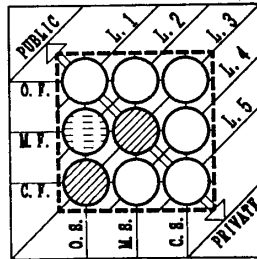
PUS 類型研究事例リスト

CODE	施設名称	施設データ	平面図
PUS-09	鎌倉都市 オアシス・ロッジ・アシスタ	所在地：神奈川県横浜市泉区鎌倉 1-1-9 用途：駐車場、店舗、事務所、住宅、 郵便局 竣工年：1993年3月 敷地面積：22,186.51㎡ 建築面積：1,729.88㎡ 建蔽率：79% 設計：山本理顕設計工場 施工：相鉄建設	 0 10
PUS-10	藤沢市湘南台文化センター 市民シアター	所在地：神奈川県藤沢市湘南台1-8 用途：市民シアター 公民館事務室 展示 ホール ワークショップ キッチン 宇宙劇場 体育施設 竣工年：1990年7月 敷地面積：7,970.30㎡ 建築面積：1,344.83㎡ 建蔽率：43.29% (許容 80%) 設計：長谷川逸子・建築計画工房 施工：大林組	 0 50
PUS-11	横浜ビジネスパーク・ 横浜ガレリア	所在地：神奈川県横浜市保土ヶ谷区 神戸町134 用途：店舗 回廊 竣工年：1990年11月 敷地面積：54,099㎡ 建築面積：373㎡ 建蔽率： 設計：マリオ・ベリーニ YBP設計室 施工：大林組	 0 100
PUS-12	TSUKUBA MOG	所在地：茨城県つくば市吾妻1丁目 用途：店舗、オフィス、広場 竣工年：1993年9月 敷地面積：1,282.72㎡ 建築面積：1,142.34㎡ 建蔽率：89.06% 設計：坂倉建築研究所東京事務所 施工：鹿島	 0 40

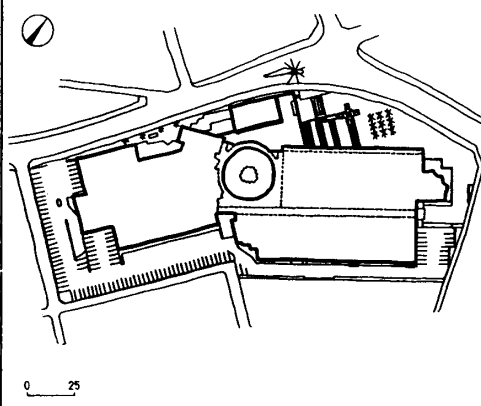
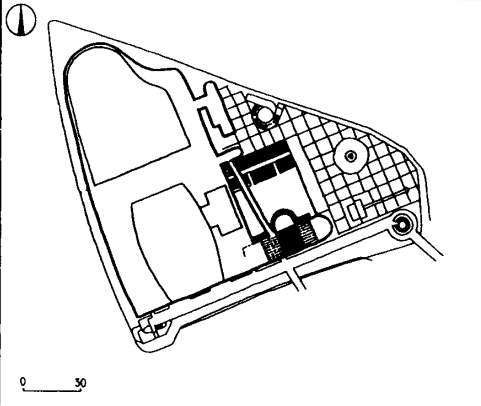
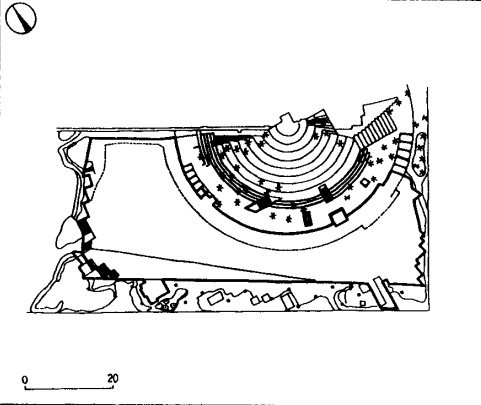
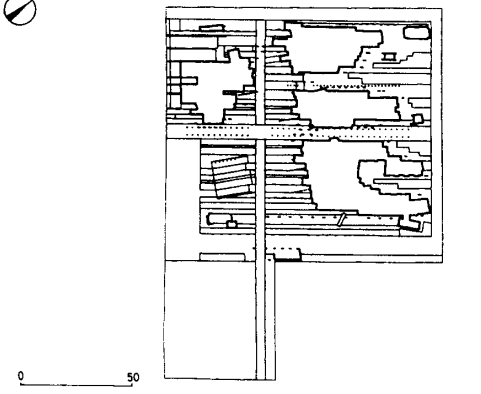
PUS 図	PUSランキング図	備 考
		<p>1、2階が商業施設で3、4階が賃貸の住宅というプログラムのもとオペリスク、シスタスは、つくられている。通り抜けの道に面して商業施設やサービス施設が配置され、その上にガラスの大屋根に覆われた居住者用の小広場がある。ロジスは、独立した計画を持っている建築である。個々の建築のデザインが建築相互の関係によってきめられる、そして相互の関係として建築をみる、という視点を獲得したとたんに、ひとつひとつの建築の固有性というのか、単体性がうしなわれて小さな場面とかが一つの建築よりも優位になるようなのである。</p> <p>担当者：山本明美</p>
		<p>「こども館」「公民館」「市民シアター」から成る複合施設。全体ヴォリュームの70%を地下に埋設することでせせらぎの流れる広場を地表レベルに獲得している。広場を囲ってプラネタリウム、大気測定室、無線室、4球儀と小屋根群が配されている。庭園的な空間は子供達や、お母さんに本物の自然に接しているごとく使われている。</p> <p>担当者：夏允淑</p>
		<p>敷地面積13haにおよぶ工場跡地に、オフィス、コンピューターセンター、ホテル、商業施設など、延べ床面積24万㎡の総合的開発を行うもので、民間主導の総合開発としては最大規模のものである。また、近接する「みなとみらい21地区」と共に、業務核都市横浜の一端を担い、首都圏分散を促進するものとして期待されている。横浜ガレリアは、YBP地区の中心に位置するパブリックスペースで、ペリー二の丘とウェスト、MRI、イーストの三棟の高層棟低層部にある「彫刻のホール」「光のホール」「絵画のホール」およびそれらに囲まれたプラザなどからなっている。</p> <p>担当者：夏允淑</p>
		<p>MOGは、筑波研究・学園都市のセター地区である。周辺にはつくばセタービルをはじめ、ショッピングセンター、立体駐車場など大規模施設が徐々に建設されつつある。建物は、細長い特殊な形状にしており、同時に施工されたペデストリアンデッキと接している。東側の敷地は現在、平面駐車場として利用されており、ファードは100mの幅で周囲に開放されている。南側正面の大階段は、前面広場と一体化し、イベント時の客席として都市空間に開かれた装置として設けられたものである。</p> <p>担当者：夏允淑</p>

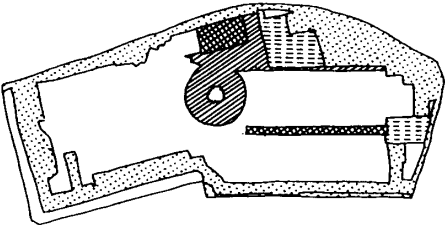
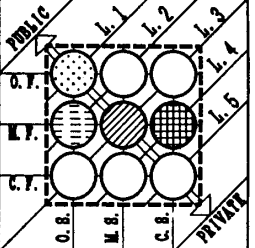
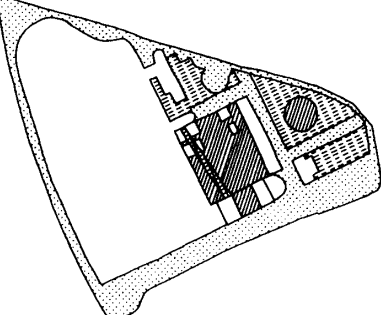
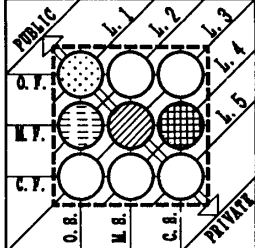
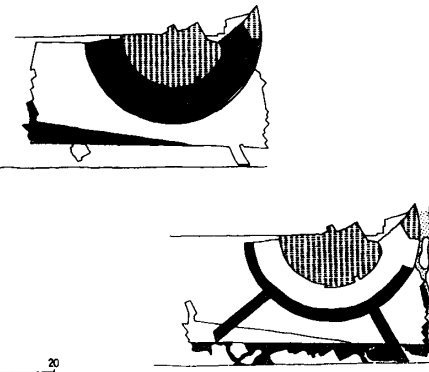
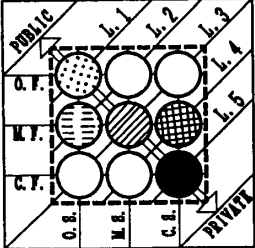
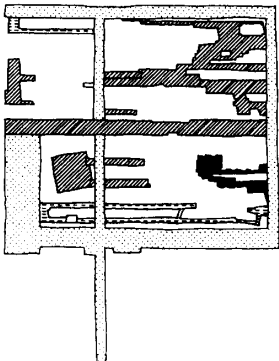
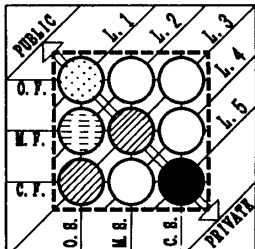
PUS 類型研究事例リスト

CODE	施設名称	施設データ	平面図
PUS-13	つくばセンタービル	<p>所在地：茨城県つくば市</p> <p>用途：ホテル、商業ビル、広場、店舗</p> <p>竣工年：1983年6月</p> <p>敷地面積：10,642m²</p> <p>建築面積：8,379m²</p> <p>建蔽率：78%</p> <p>設計：磯崎新・ア・リ</p> <p>施工：住宅・都市整備公団</p>	 <p>0 50</p>
PUS-14	水戸芸術館 (ART TOWER MITO)	<p>所在地：茨城県つくば市五軒町1-6-8</p> <p>用途：エントランス、劇場、美術展示室、会議場、塔、広場、地下駐車場</p> <p>竣工年：1990年2月</p> <p>敷地面積：13,941m²</p> <p>建築面積：6,873.910m²</p> <p>建蔽率：49.31%</p> <p>設計：磯崎新・ア・リ</p> <p>施工：共同企業体</p>	 <p>0 50</p>
PUS-15	水戸市立西部図書館	<p>所在地：茨城県水戸市堀町2311-1</p> <p>用途：図書館</p> <p>竣工年：1992年3月</p> <p>敷地面積：21,283.66m²</p> <p>建築面積：3,188.98m²</p> <p>建蔽率：14.9%</p> <p>設計：新居千秋都市建築設計</p> <p>施工：JV、竹中工務店</p>	 <p>0 30</p>
PUS-16	埼玉県立近代美術館	<p>所在地：埼玉県浦和市常盤9-30-1</p> <p>用途：美術館</p> <p>竣工年：1982年</p> <p>敷地面積：46,457.00m²</p> <p>建築面積：2,238.00m²</p> <p>建蔽率：</p> <p>設計：黒川紀章</p>	 <p>0 20</p>

PUS 図	PUSランキング図	備 考
		<p>筑波研究学園都市の中心に位置し、その中心としての性格がデザインに投影された設計となっている。自動車道に面したグラウンド側と1層分あがった建物の2階レベルにあたるベデ（歩行者専用道）・広場の双方に建物の顔を向けることが必要とされたため広場空間が設けられた。視覚的に分割された2棟の建物（A棟とB棟）が広場をL字型に囲いこむ形となった。広場の中央には2層の交通ネットワークをもつこの都市構造を暗示するフォームと呼ばれる楕円形のシンク・プラザがはめ込まれている。</p> <p>担当者：夏允淑・三島理香</p>
		<p>水戸駅から西へ1km余り国道50号線を進んだ街の中心地に位置する。敷地は旧五軒小学校の跡地で商店街の背後の住宅地に接している。地形的には、台地のほぼ中央にある。芸術館は、エグゼクティブ、円形劇場、現代美術ギャラリー、それに会議場とエントランスが加わった複合施設でありそれらの施設はそれぞれを運営する芸術監督が早くに任命されその将来の仕上の構想に基づいて細部のデザインが決定された。</p> <p>担当者：夏允淑・三島理香</p>
		<p>設計者が手がけた栃木県矢板市のアースコルアカラ、静岡県伊東市のエスプラザ（研修施設）に続く三部作の1つである。図書館内は、円形の一般読書室、青少年コーナーなどの空間の外側に、トッパライのある部分で3mの幅をもつアートギャラリーが取り囲んでいる。そのギャラリーにつながるように東西の入り口を挟んで視聴覚室、児童読書室等が、対称に設計されている。</p> <p>担当者：夏允淑・三島理香</p>
		<p>北浦和駅近くの都市公園の一角にある敷地は展示室が立体的に積層となった四角い建物となっている。ポプラや白カシの並木を通して親しみのある感じで美術館にアプローチできるエントランスポーチは、内部とも外部ともつかない中間領域として、来館者を自然に公園から美術館に導く。立体的な展示空間に自然の流れと光を考えて生まれたのが大吹き抜け空間とセンターコート。ここはまた、新しいジャンルの芸術作品の展示にも力を発揮する。館内の各所に座れる展示物として置かれている世界の椅子のコレクションも人気がある。</p> <p>担当者：夏允淑</p>

PUS 類型研究事例リスト

CODE	施設名称	施設データ	平面図
PUS-17	彩の国さいたま芸術劇場	<p>所在地：埼玉県与野市上峰3-15-1</p> <p>用途：文化ホール</p> <p>竣工年：1994年3月</p> <p>敷地面積：18,978㎡</p> <p>建築面積：10,713㎡</p> <p>建蔽率：70%</p> <p>設計：香山嘉夫+環境造形研究所</p> <p>施工：ハザマ・大成・八生特別共同企業体</p>	
PUS-18	ソニックシティ	<p>所在地：埼玉県大宮市桜木町1-441</p> <p>用途：オフィス ホテル ホール</p> <p>竣工年：1988年3月</p> <p>敷地面積：17,484㎡</p> <p>建築面積：12,110㎡</p> <p>建蔽率：69.26%</p> <p>設計：日建設計</p> <p>施工：フジタ工業</p>	
PUS-19	進修館	<p>所在地：埼玉県南埼玉郡宮代町笠原1-1-1</p> <p>用途：劇場ホール、研修、集会施設、喫茶室、広場</p> <p>竣工年：1980年5月</p> <p>敷地面積：5,166㎡</p> <p>建築面積：2,484㎡</p> <p>建蔽率：48%</p> <p>設計：象設計集団</p> <p>施工：間組</p>	
PUS-20	川里村ふるさと館	<p>所在地：埼玉県南埼玉郡川里大字関新田1300</p> <p>用途：保険センター 図書館 郷土資料館 福祉センター コミュニティセンター</p> <p>竣工年：1993年12月</p> <p>敷地面積：15,562.27㎡</p> <p>建築面積：3,462.47㎡</p> <p>建蔽率：22.24% (許容70%)</p> <p>設計：相田武文設計研究所</p> <p>施工：島村工業</p>	

PUS 図	PUSランキング図	備 考
		<p>県民が自ら舞台芸術活動を行い、優れた舞台芸術を鑑賞する機会を設けるという設立趣旨から誕生したこの文化ホールは、専門ホールが四つあり、ガラスブロックの壁が上部を囲む円形劇場「ロトンダ」を中心に配置されている。トップクラスの舞台機構を備えた「大ホール」と、シューボックス式の「音楽ホール」がロトンダを介して対面する。ギャラリーとロトンダの接点に「小ホール」、通り沿いに「映像ホール」がある。演劇や舞踊のための稽古場が6つ、音楽用の練習室も6つ、舞台装置をつくる工房まで用意されている。</p> <p>担当者：夏允淑</p>
		<p>ソニックシティのホテル部分は、機能的にはオフィス部分からの独立性を保ちながらオフィス棟と一体の建物と同等の便利を持つことも可能となっている。広場は、イベントプラザとして、県の大きな展示場のある地下1階のレベルまで下げられ、内外の空間が各種のイベントの時に一体的に利用することができるようになっている。イベント広場の南側に位置するホテル棟の下部は、大きく横に吹き抜けられ、地上レベルとデッキレベルからの歩行者の視線が南北に開放され、南側の道路からイベント広場、地上の広場、北側商店街の通りまで連続する透視空間が建物の東側に作りだされている。</p> <p>担当者：夏允淑</p>
		<p>建築の1層部分を、大地に埋め込み、その上を中庭とし、すり鉢状の1層の建物にみえる。1階は半円形の中庭の中心に向かい、2本の通路が貫き、通り抜けられる。2階の同位置には「コネクト」が中庭広場と大ロビー・テラスを結んでいる。中庭広場は、中心から階段状にせり上がり、屋上に向かって同心円状に無数の柱が建つ。建物には薫がからみ緑多い建物となっている。</p> <p>担当者：夏允淑・三島理香</p>
		<p>川里村ふるさと館は、分散されていた施設を統合する意味あいから新たに総合施設として建設されたものである。具体的な内容は行政文化、レクリエーション等が複合した施設として保健センター、図書館、郷土資料館、コミュニティセンター、福祉センターという名称のもとに5施設が複合配置されたものである。分散配置された建築には外部と内部という通常の空間構成を消去できる要素をもっている。そこには、光や影の移行、季節の風が通り過ぎ、建築には風景と一体化する。</p> <p>担当者：夏允淑</p>

4-1 敷地内パブリックスペースの類型

敷地内パブリックスペースの事例として選定したのは、1980年から1994年までに竣工した我が国における事例であり、比較的敷地内で公共的空間を重要視して計画され、建設されたものを対象とし、実際にその空間に足を踏み入れ、自由通行ができ、現段階で公共空間として特色を持っているものについてあげている。

各事例の示し方は、施設名称、建築概要（所在地、用途、竣工年、敷地面積、建築面積、建築率、設計者、施工会社等）、主要図面としての平面計画図と断面計画図、その敷地計画図を下地として、パブリック空間のランキングをしたゾーニング図（PUS図）を示し、5段階のランキング手法における位置づけを示し、その概要備考欄に示している。

第5章 結果の総合化

都市の道路空間の類型を目指して敷地内のパブリックスペースの形態を検討することに目を付けた事は、道路空間の中での広場的空間が、重要なキーポイントとなり、その広場的空間が、現代の日本では敷地内空間として作られる場合が多いとの現状認識から出発している。最終的には、都市のパブリックスペースの計画手法へと結びつけていくことが目標であるが、現段階では、この都市のパブリックスペースの生態を捉えていくことを課題としている。

敷地内広場の対象は、明確な設計者が現代において、敷地計画の技法に則って計画した現代の広場であることである。そして、いずれも現代の人々にとって都市生活の中で中心的役割を果たしており、憩いの広場であったり、イベント広場であったり、そのあり方は多様であるが、いわゆる都市広場と同列に比較していったよい対象であるように感じている。敷地内広場については、単に道路のみの空間ではなく、多彩な

人間のための空間を計画している場合が多く、むしろこの計画手法を都市広場の計画に応用していった方がよい場合も出てきそうである。ランキング手法を適用させ、その結果を判断しながら、敷地内パブリックスペースから出発して都市広場への適用についての検討をしていったらよいのではないかと考えている。

5-1 ランキング手法の問題点・課題

3章で導入したパブリックスペースのランキング手法について、実際の都市空間に適用を行った結果、その問題点・課題が以下のように挙げられる。

- 1) 空間の軸、機能の軸の2軸で捉えることの正当性をいかに示したらよいのかの課題は、現段階ではその評価を示すことは出来ていない。それは、空間を捉えるのに、形態と機能で捉えることが妥当であろうとの予測から出発しているので、当論の中での解決は出来ないであろう。ただし、このランキング手法によって、多様な都市のパブリックスペースが整理され、明快にランキングがなされたとなると、その実証性によってある程度の効果を得たことになるのではないかと考えている。その意味で考えると、現段階での事例数は多いとは言えないが、その効能は認識できたと言えるかもしれない。今後その効能について評価をしていく必要があるだろう。
- 2) 空間の軸と機能の軸の段階区分を3段階で行っているが、経験上3段階程度しかできないであろうとの結果からとりあえず定めているが、これを4段階にすべきか、5段階にすべきかの判断をいつか行わなければならないであろう。ただし、現段階までの判断では、3段階ならば比較的判断はそれほど間違いなくできる様である。つまり、プラスかマイナスかあるいは中庸値かの判断は比較的可能であった。これが、4あるいは5段階となったときには、判断自体が難し

くなるであろうと考えられる。

3) 2軸の段階分けの組み合わせで公共性の度合いを5段階に整理しているが、例えば、CLOSED FUNCTION-OPENING SPACE, MEDIUM FUNCTION-MEDIUM FUNCTION, OPENING FUNCTION-CLOSED SPACE の3種類の組み合わせを同レベルとしている点が、このランキング手法の問題点としてある。基本的にこの形式で定めているので、この手法自体が問題であれば、軸構成自体の見直しをしなければならないであろう。当面の問題として、5段階のレベル評価についての妥当性は今回では持ち越しとしたい。レベル判断をすると同時に、9個の組み合わせについて判断した図を示していくことでとりあえずの解消としていきたい。

5-2 敷地内パブリックスペース（PUS）についての考察

敷地内パブリックスペースについては、文献で調査し整理したものは67事例に及ぶが、その中で実際に調査を行った中から20事例に絞って示したが、それぞれ特色をつかむことが出来た。しかし、20事例では事例数としては満足いく数には至ってはいない。というのは、実際に調査を進めていくに従って敷地内パブリックスペース（PUS）の多様性というものがはっきり認識できるようになってきたことである。20事例では、その中から類型を示していくことは少し難しいとの判断が現段階での限界であろう。

しかし、敷地内パブリックスペースの生態自体は、極めて興味ある対象である点は、最初に示したとおりであった。これは、ある建築家とか、設計事務所が基本理念を持って設計を行っている、その考え方をパブリックスペースの構成法の点から見直して見るというのが今回の研究の方向であったので、その意味では、十分その設計についての基本的考え方を抽出していく

ことは出来たと考えている。

5-3 パブリックスペースの境界要素についての検討

都市広場についても、敷地内パブリックスペースにしろ調査を行っていく場合に重要なものは、境界要素であることは十分に認識できた。つまり、レベル区分、あるいは、軸構成の判断の分かれる境界要素の部分がいかなる要素で作られているかである。たとえば、都市広場の建築的構成要素として、ポーチとかアーケード、階段や坂、壁と塀など空間を境界づけていく要素が、パブリックスペースの空間の違いを明確にするための要素として示されてくることが認識できた。特に敷地内パブリックスペースの場合は、自由に構築的要素を建築レベルで配置できるために、多彩な境界要素があり、その境界要素の特性で、空間の作られ方が決まっていることがわかった。広場、回廊、テラス、通路、コーナー、階段、緑地、塀、段差、アーケード、ピロティー、柱、列柱、壁等の要素が、空間の色合いを決めているし、その空間のランキングに対応してひとつひとつの装置として働いていることがわかった。その意味で、ひとつの方向として、今後このような要素群を整理し、ランキングと結びつけていくことが、パブリックスペースの計画論を組み上げることとなるとの判断も可能であろう。

また、空間のボキャブラリーとして、要素群と空間・機能の軸構成との対応で整理していくことが設計手法にもつながっていくと思われる。

5-4 今後の方向

以上の検討を踏まえ、今後の方向を判断するときに以下の項目を考えることが出来る。

1) 敷地内パブリックスペースをランキング手法で捉える道筋は、計画論や、空間の構成法の

整理などの点で可能性を有していることがわかったので、今後、対象事例数を増やしていきながら、ランキング自体の正当性を論議できる場を作り出していく必要がある。

2) 前節で整理したように、今後の計画手法・設計手法につながる意味で、空間の境界要素として機能する装置、つまり、空間のボキャブラリーを整理し、パブリックスペースの性格を規定する要素群として示していくことが、本研究の一つの成果となると判断している。

3) この手法は、パブリックスペースの構成法の研究であると同時に屋外空間のランドスケープの研究にもつながりを持つものである。あるいは、屋外環境の環境心理分野での研究にも密接な関係を有しているものであると考えている。その意味で、各種分野の研究手法を応用して、一体化した研究手法へ組み上げていくことが出来れば、極めて有効な計画論にもつながっていくものであろうと判断している。それ故、関連する研究分野の人たちとの協同の方向をたどっていくことも重要な今後の方向であろうと考えている。

おわりに

この研究は、海外都市広場調査研究がその研究の視点を誘導する段階で基盤となっているものである。この都市パブリックスペース (PUS) 類型化研究は1994年から開始し、1995年に調査を行い始めた新しい研究である。いずれの研究についても都市パブリックスペースの在り方という点では、同系統の対象を扱ってきたものである。また、上記の二つの研究ばかりでなくさらに広い意味で統合する研究つまり、研究室の基本的方向を示す意味での研究として、活動状況図 (ACTIVITY MAP) の表現手法に関する基礎的研究があり、1988年から開始されている。いずれにしろ、研究手法を組み上げるところに

主眼点を置く研究として位置づけられているものである。

そして、都市のパブリックスペースを対象とする研究は、都市広場を研究対象として選定してから考えると、長く継続しているものであり、1984年から11年間に及ぶ継続研究となっている。

今回のこの研究を行うにあたって、今までの研究の整理と統合をはかり、今後、都市のパブリックスペースの類型研究としていく方向が生まれたことは、大きな成果であった。特に、我が国における在り方を考えると、単に都市広場としていると公共空間における形態に限定されていくことが問題であったし、敷地内広場つまりPUSに広げていったときに研究自体の幅が広がることと、我が国としての状況に対応した研究になっていく点で有効な研究に出来ると判断している。

参考文献

A. パブリックスペース・都市広場に関する文献

- 01 都市と建築のパブリックスペース, 森島清田訳, 鹿島出版会, 1995
- 02 広場の空間構成, 三浦金策著, 鹿島出版会, 1993
- 03 都市と広場, ポール・ズッカー著, 鹿島出版会, 1975
- 04 人間のための街路, B. ルドフスキー著, 鹿島出版会, 1973
- 05 南欧の広場, 加藤晃規著, プロセスアーキテクチュア, 1980

B. 事例を参照した資料

- 01 新建築1995年1月号, 新建築社, 1995
- 02 日経アーキテクチュアNo412, 日経B P 社, 1991
- 03 建築雑誌増刊 作品選集1992, 日本建築学会, 1992
- 04 THE JAPAN ARCHITECT 1992 ANNUAL

- 建築年鑑，新建築社，1992
- | | | | |
|----|----------------------------|----|---|
| 05 | 新建築1992年6月号，新建築社，1992 | 19 | 新建築1991年1月号，新建築社，1991 |
| 06 | 新建築1988年5月号，新建築社，1988 | 20 | 新建築1994年3月号，新建築社，1994 |
| 07 | 新建築1992年9月号，新建築社，1992 | 21 | ディテール別冊 磯崎新のディテール つくばセンタービルの詳細，磯崎新アトリエ，1985 |
| 08 | 新建築1987年12月号，新建築社，1987 | 22 | 新建築1990年7月号，新建築社，1990 |
| 09 | 新建築1994年9月号，新建築社，1994 | 23 | 水戸芸術館資料，財団法人水戸市芸術振興財団，1991 |
| 10 | 日経アーキテクチュアNo460，日経BP社，1993 | 24 | 新建築1992年8月号，新建築社，1992 |
| 11 | 日経アーキテクチュアNo424，日経BP社，1992 | 25 | 別冊新建築1986 日本現代建築家シリーズ 10黒川紀章，新建築社，1986 |
| 12 | 新建築1991年8月号，新建築社，1991 | 26 | 日経アーキテクチュアNo499，日経BP社，1994 |
| 13 | 新建築1993年3月号，新建築社，1993 | 27 | 新建築1988年5月号，新建築社，1988 |
| 14 | 新建築1994年1月号，新建築社，1994 | 28 | 進修館資料 |
| 15 | SD1995年1月号山本理顕，鹿島出版会，1995 | 29 | 建築文化1993年10月 あいまいもこ象設計集団，彰国社，1993 |
| 16 | 新建築1992年10月号，新建築社，1992 | 30 | 新建築1994年7月号，新建築社，1994 |
| 17 | 新建築1993年6月号，新建築社，1993 | | |
| 18 | 新建築1991年6月臨時増刊 建築20世紀 | | |